016301-000-2

82-676

法隆寺伽藍巡拝記

鳥居　武平（蕪坪）／編

M44.4

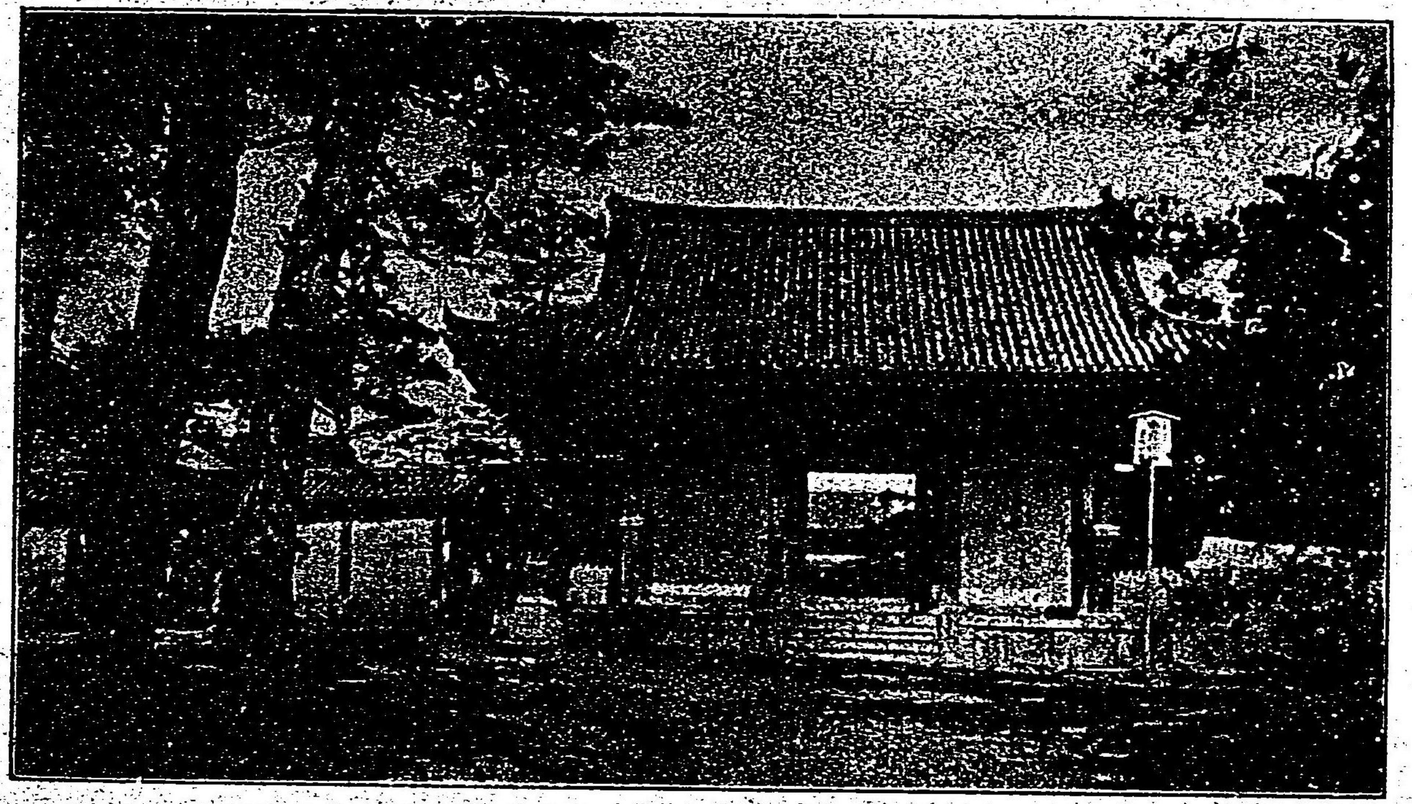
ABD-0218

82
676

寫眞銅
版挿畫

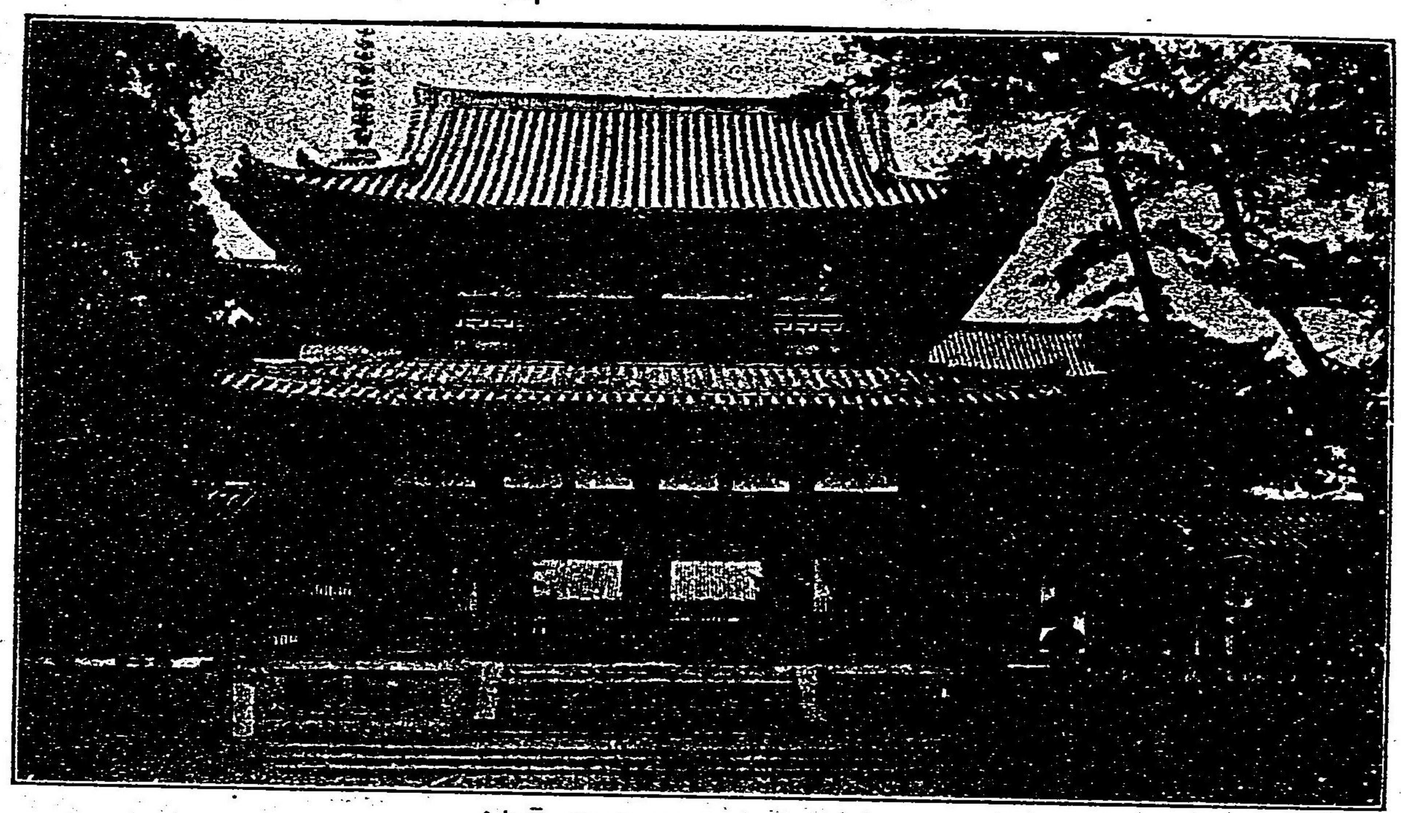
法隆寺伽藍巡拜記

右　大　門



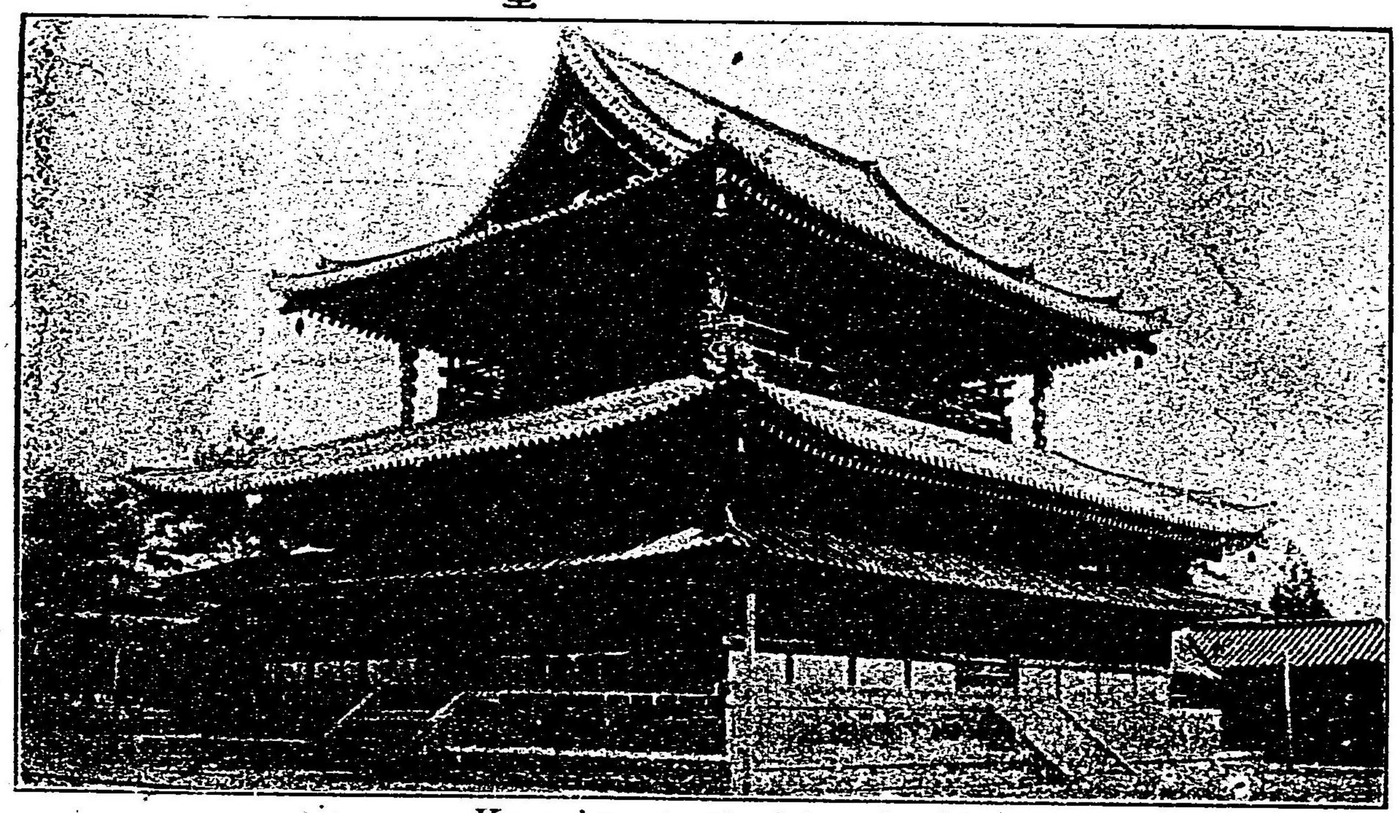
Southern Gate.

82-676



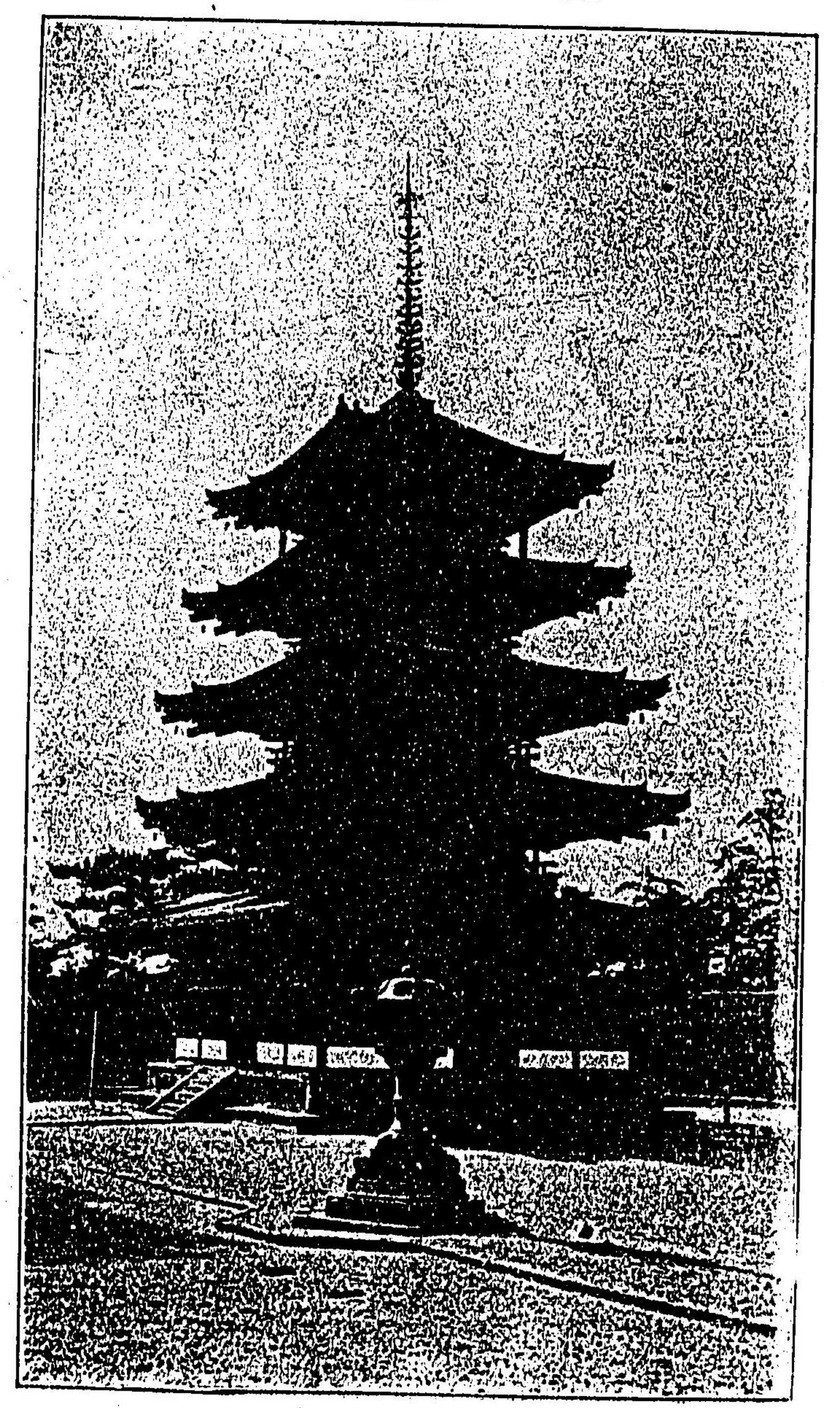
Chi-men or Second Gate.

堂



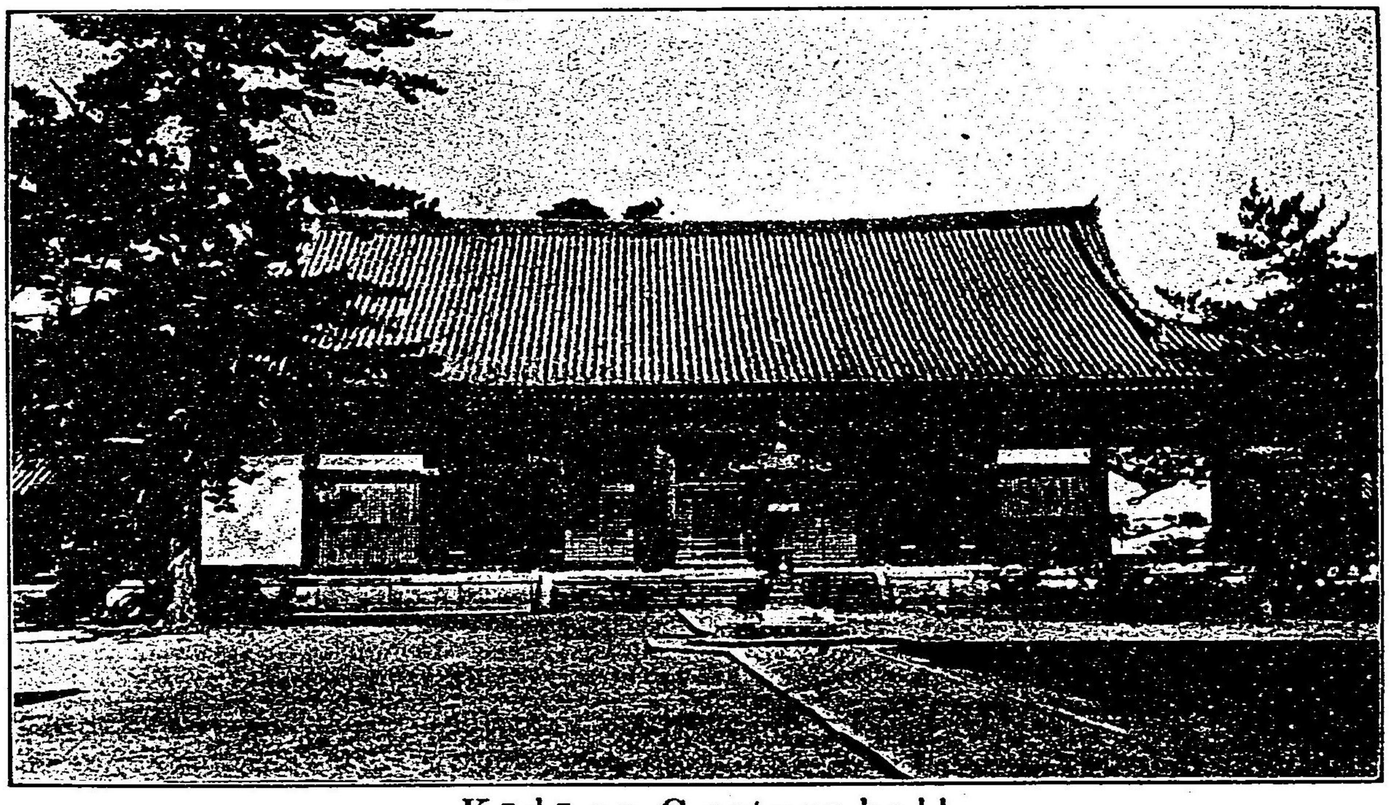
Kondō or Golden hall.

五重塔



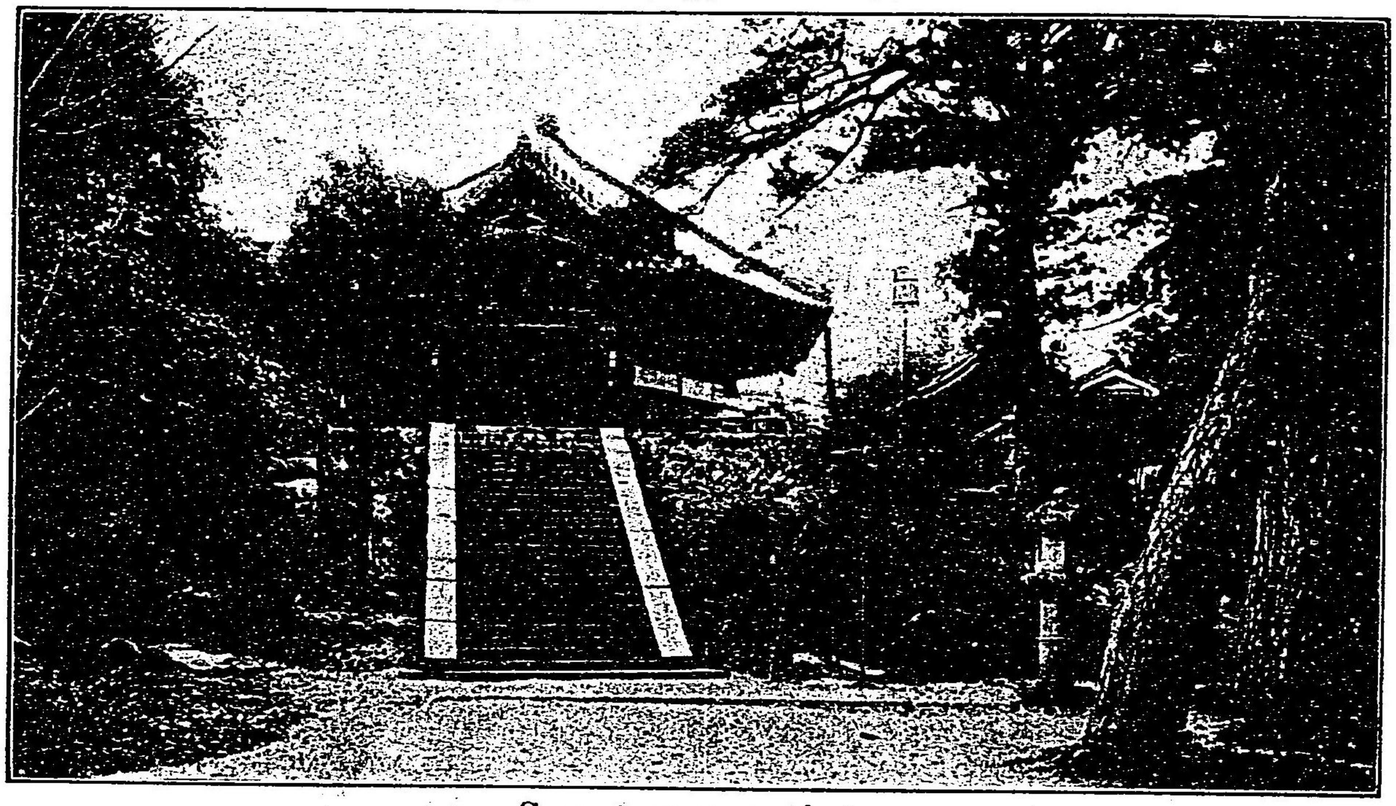
Five-storied Ragoda.

講堂



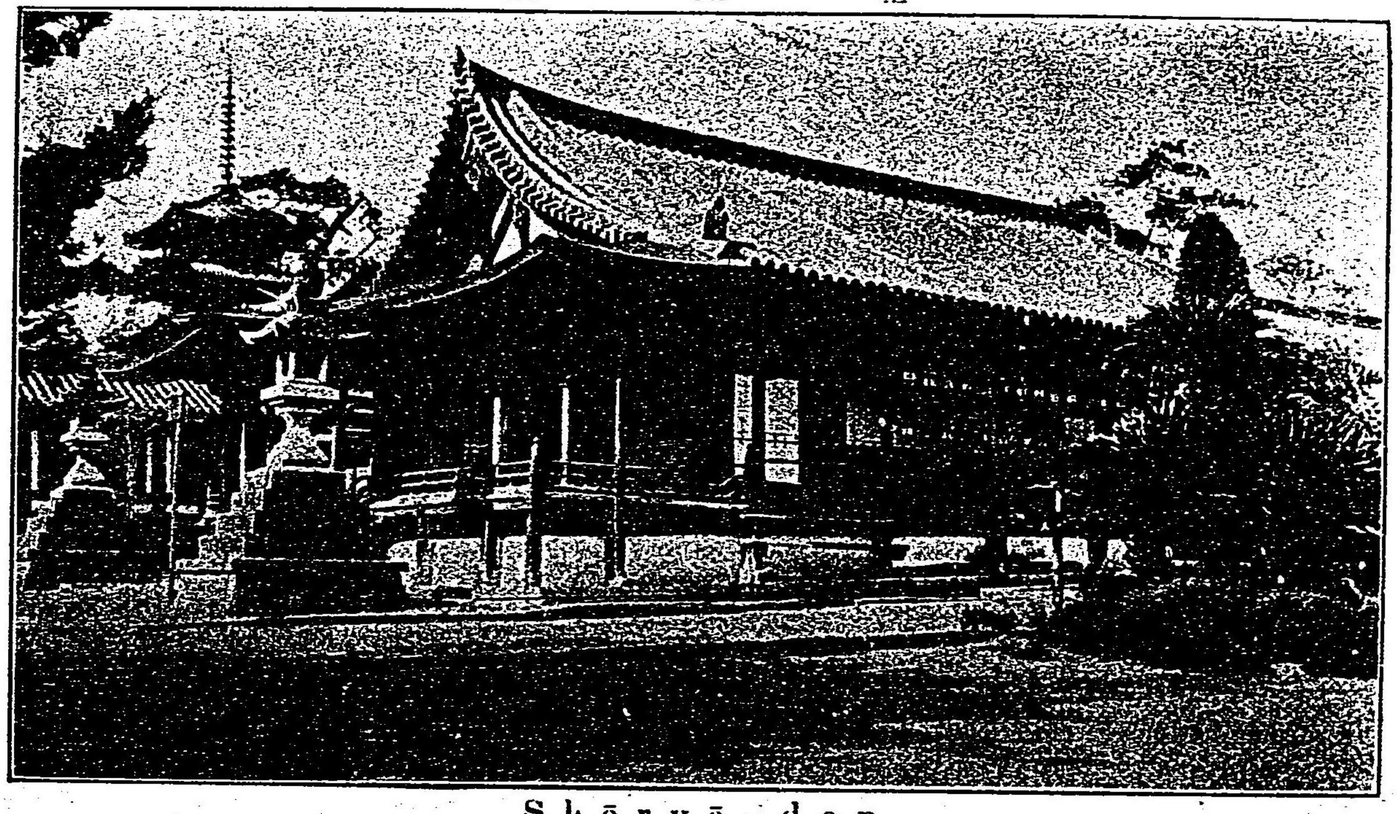
Kōdō or Cecture hall.

西圓堂



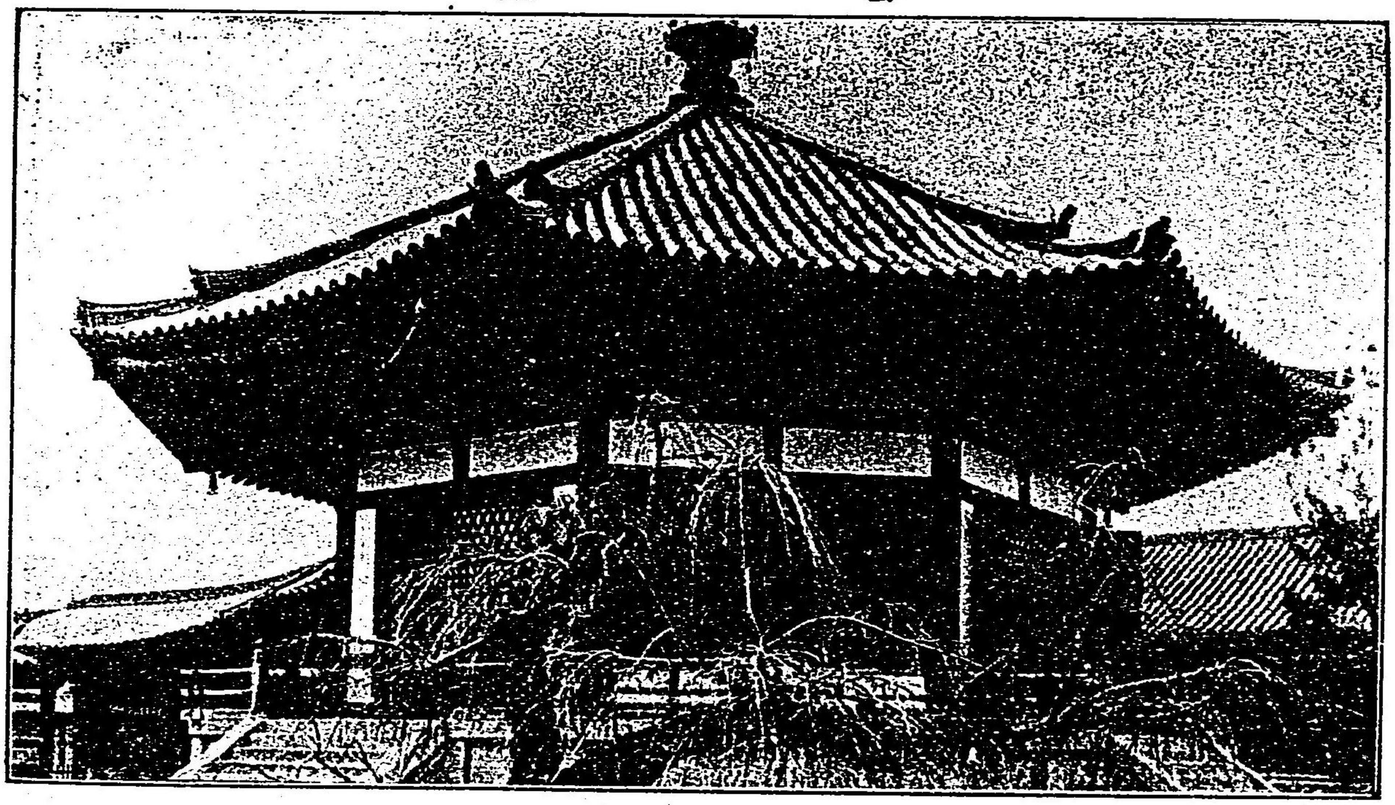
Saiyendō.

聖靈殿



Shōryō-den

夢殿



Yume-dono or Studying-room.

孟子

乃治辛亥孟春

濬隆貫之題

叙言

鳥居武平寄贈本

法隆寺は、法相宗の大本山にして、南都七大寺の其一なり、初め聖德皇太子用明天皇の敬願を奉じて、推古天皇元年（或云六年）より同十五年に亙り、造立せらるゝ所なり、爾來一千三百有餘の星霜を閲すと雖、規模宏麗、殿宇の壮大なる、當初の体面を失はず、實に天下無雙の靈場なり、殊に聖德皇太子は佛教を以て吾邦に興し、寺側に斑鳩宮を建め、茲に萬機を攝政し給ふ、聖智聰明に座まして、一たびに十人の訴を聞て失たず、且未然を識り、深く佛乘を崇み、禪室を宮殿の中に構て、三昧を修し、夢に託して三世の因緣、海外の狀況等を法話し給ふ、是れ東院卽ち上宮王院なり、又躬ら法華、勝鬘、維摩の三經を

44. 4. 15
寄贈

講説し萬世傳燈の道場と定め給ひしは、卽ち西院の靈殿寶閣是なり、是を以て諸宗の高祖智識頻りに來錫詣拜し、尊信恭敬誠に盛なり、三國傳來の珍寶、三寶興隆の法器、儼然として靈殿寶閣に充滿せり、而して其之を今日に相傳するは洵に聖皇懿德の致す所にして、啻に一寺の光榮なるのみならず、實に藝術史家に及ぼすの餘慶亦大なりと謂はざるべけんや、因て巡拜諸子の爲に、伽藍諸堂の略説を附記し、聊か參照に便すと、爾か云ふ、

明治四十四年四月

蕪坪居士識

目次

○西院	頁	西圓堂	一七	東室	二六
南大門	二	供物調度所	一九	妻室	二七
中門	二	手水屋	一九	厩	二七
廻廊	三	地藏堂	二〇	觀勒僧正堂	二八
金堂	三	三經院	二〇	鏡池	二九
五層寶塔	二	西室	二一	食堂	二九
大講堂	二四	三經院前地	三	細殿	二九
大經藏	二五	辨財天堂	三	綱封藏	三〇
鐘樓堂	二五	浴室	三	護摩堂	三〇
上御堂	二五	聖靈院	三	聖天堂	三
十二天堂	三四				
西大門	三四				
北門	三五				
東大門	三五				

○東院　五所宮舊跡
夢殿　三七　南大門　四九
貳殿院　四一　四脚門　五〇
舍利殿　四三　坑門　五一
傳法堂　四四　律學院
鐘樓堂　四七
一切經輪藏　四八
禮堂　四八
廻廊　四八
步廊　四八
福石辭天社　四九
○附錄
葦垣宮古跡　五三
幸隆寺　五四

法隆寺伽藍巡拜記

蕪坪居士編

法隆寺は、大和國生駒郡法隆寺村にあり、地は卽ち法隆寺驛より北方十町許、寺は、推古天皇の御世、聖德太子の御建立にして、佛法最初の靈場なり、宗旨は、初め三論宗にて、法相を兼しが今は法相宗の大本山なり、寺號は、法隆寺といひ、又斑鳩寺（又鵤寺、いかるが、に作る）、伊珂流我大寺（又鵤大寺、いかるがに作る）鵤僧寺（いかるがぜ）ともいふ、又堂塔に寺號あり、卽ち法隆學問寺（南門、を云）來立寺（中門、を云）鳥路寺（經藏、を云）七德寺（金堂、を云）寶龍寺（鎭守、を云）聖國寺（講堂、を云）往生所寺（五重塔、を云）是なり、寺領は、往古五千石ありしが、天正年間より減じて一千石となる、現境內坪數は、二萬八千四百九十七坪ありて、東西の兩院に分立す、西院卽ち其本寺なるを以て、先づ西院より筆を起し順路に從て東院に及ぼすべし、

○西院

境内坪數壹萬三千二百六十八坪

○南大門　西院表門是なり(門前並松の通路を松の馬場と云ふ)一名法隆學問寺と號す、一重八足造、桁行五間、梁行三間なり、白河天皇の承暦年中(元年迄紀元千七百三十七年)燒失し、尋て再建す、其後、後花園天皇の永享六年(紀元二千五十九年)正月十日燒失し同十一年造立今の門是なり

○中門　南大門の北にあり　創立の儘

一名來立寺と号す、二階造樓門なり桁行六間五寸梁行四間二尺二寸

金剛力士像　埴造長各壹丈二尺　二軀

此像は資財帳に、和銅四年歳次辛亥二寺造者とあり、鳥佛師作と云は誤なり

此門の二階にありし、孝謙天皇の御世に製作せし百萬塔今尚現存す

○廻廊(創立の儘)　幅壹丈二寸、總長百十九間三尺二寸

廻廊外陳連子なり東西に小門各四所あり其中間を東西の樂門と云ふ巽と坤の隅なるは慶賀門といふ

○金堂　二階造南面　(桁行九間二尺五寸　梁行七間四尺七寸)

用明天皇の勅を奉し推古天皇聖德皇太子と共に御建立推古天皇元年(紀元千二百五十三年)或は云六年に始り同十五年に至て落成する所にして總本堂是なり一名七德寺と号す神護景雲年中孝謙天皇最勝王經吉祥天御願に依て同年正月七日より七晝夜修正會を行ふ今尚絶(たえ)ず之を行ふ

本尊藥師如來(やくしにょらい)坐像　金銅　長四尺八寸後背共　傳鳥佛師作

脇士日光菩薩立像　金銅　長壹尺七寸五分　傳鳥佛師作

脇士月光菩薩立像　金銅　長壹尺七寸五分　傳鳥佛師作

本尊は用明天皇の御惱を平癒せさせ奉らんか爲に推古天皇（用明天皇御妹にて敏達天皇皇后なり聖德太子用明天皇皇子なりと共に誓願して平癒せさせ給へば藥師像を作りて供養せんと祈り給ひしかど其驗なく崩御し給ふされど誓願を遂げんとして推古天皇の十五年に造り畢へて當堂に安置せるものなり光背銘に云　池邊大宮（十市郡阿倍村大字長門）治天下天皇（用明天皇）大御身勞賜時歲次丙午年（用明天皇元年）召於大王天皇（推古天皇）與太子（聖德太子）而誓願賜我大御病大平欲坐故將造寺藥師像作仕奉詔然當時崩賜造不堪者小治田大宮（高市郡豐浦村）治天下大王天皇及東宮聖王（聖德太子）大命受賜而歲丁卯年（推古天皇十五年也）仕奉

仝南面西間

本尊阿彌陀如來坐像　金銅　二尺六分　（大佛師法橋康勝　銅工平國文合作）

脇士觀音菩薩立像　仝　一尺七寸五分　傳鳥佛師作

脇士勢至菩薩立像　仝　仝　仝

此三尊は御母穴穗部間人皇女の御爲に聖德皇太子の造らせ給ひし也然るを堀河天皇承德二年盜難に罹り其後百三十四年を經て後堀河天皇貞永元年（紀元千八百九十二年）八月新造す今の尊像是なり後背に銘文あり

仝中間

本尊釋迦如來坐像　金銅　長二尺八寸五分　傳鳥佛師作

脇士藥王菩薩立像　仝　長二尺七寸　仝

脇士藥上菩薩立像　金銅　長二尺七寸　傳鳥佛師作

此三尊像は聖德皇太子薨去後太子の妃王子及諸臣等協力して作る所のものなり光焰銘に云法興元世一年（推古天皇二十九年に當る）歲次辛巳十二月鬼前太后（聖德太子御母穴穗部間人皇女の御事）崩明年（推古天皇三十年也）正月廿二日上宮法皇枕病弗念干食王后（王后は聖德太子の妃なり膳臣加多夫古の女菩岐岐美郎女）仍以勞疾並著於床時王后王子等（太子の妃の他の王后也）及與諸臣、深懷愁毒、共相發願仰依三寶當造釋像尺寸王身、蒙此願力、轉病延壽、安住世間苦是定業以背世者、住登淨土、早昇妙果二月廿一日癸酉（推古天皇三十年）王后卽世（太子の妃）翌日法皇登遐（法皇は聖德太子也）癸未年三月中（推古天皇三十一年）如願敬造釋迦尊像並狹侍、及莊嚴具竟乘斯微福、信道知識、現存安穩、出生入死、隨奉三主（釋迦三尊を云）紹隆三寶遂共彼岸普遍六道、法界含識、得脫苦緣同趣菩提使司馬鞍首止利佛師造

多聞天立像　木造　長四尺六分
吉祥天立像　仝　長三尺八寸

此二像は孝謙天皇勅願最勝悔過の料なり白河天皇承曆二年（紀元千七百三十八年）正月七日彫始め同年十一月十二日當堂に安置す最勝王經護國品曰於佛左邊作吉祥天女像於佛右邊作我多聞天像幷諸男女眷屬之類安置云云蓋此經說に由所ならん

四天王像　木彫　長各四尺四寸　四軀

西北　二天の圓光に銘あり西方天の銘に云く『山口大口費上而次木閉二人作也』北方天の銘に云『藥師德保上而鐵師古弖二人作也』とあり日本紀曰孝德天皇白雉元年是歲漢山口直大口奉詔刻千佛像云云蓋是等の佛工なるべし

後立菩薩立像　木彫　長各二尺八寸　四軀
作者緣起不詳

西　正　面

普賢延命坐像　木彫　長三尺　一軀
傳曰南天竺善無畏三藏將來する所

北　正　面

本尊阿彌陀如來坐像　金銅　長一尺六寸　一軀
脇士觀音菩薩立像　仝　長八寸五分　一軀
脇士勢至菩薩立像　仝　仝　一軀
此三尊は厨子水深高さ八尺八寸内須彌坐に安置す厨子に密陀繪あり橘夫人光明皇后母公の造ら

しむる所なり内裡に金銅の敷板あり波濤の圖を刻す其波より金銅の蓮華三莖を生ず卽蓮臺にて三尊を坐せしむ又後光の形扉風の如し奇異にして殊勝なり

東　正　面

玉蟲厨子　木造　高七尺八寸　壹基

觀音菩薩立像　金銅　長九寸三分　壹軀

此像は玉蟲厨子に安置す厨子は推古天皇の御物なり其形宮殿造り四圍外面には密陀僧もて經說を描く周圍の鉸具は唐艸の透彫にて其下に金花蟲の羽を伏て裝飾す故に此名あり此厨子既に一千三百有餘年を經過すと雖其羽の色澤燦然として今尙存す編省實物を見て云なり古人の工藝に意を用ふる驚嘆の外なし
傳云此厨子は初め推古天皇御祈念の彌陀三尊の像を安置せしが順德天皇建曆

元年紀元千八百七十一年九月朔日盜難に罹る其後今の觀音像を安置す因て珠厨子の觀音と稱す脇士二軀は別當範圓僧正建保中末世也安置する所なり

堂内艮隅に鎮壇あり圓形の石蓋之を覆ふ壇に八葉の緣あり是則當寺三伏藏の一にして太子の造り給ふ所なり

壁畫　内陳四面の壁にあり　傳曇徵筆

西壁に彌陀の淨土、東壁に寶生の淨土、北裏東脇の壁に藥師の刹土、西脇の壁に釋迦の國土、自餘の壁に菩薩の立像、上の柱貫の壁に羅漢山窟の粧ひ等を畫く、又天井には反花蓮花を畫き皆丹を施せり

鈞天蓋　木造彩色　參個　佛壇三座の座毎にあり

伎樂天女鳳凰　木造彩色　右天蓋に各十六個を附着す舊記に云往古より此堂閣

を開かず年序永く縱覽を禁ず常住の寺僧すら佛像を瞻禮すること甚稀なり況や都鄙の道俗に於てをや云云其尊崇すること以て見るべきなり今の如く自由に開扉するは永祿紀元二千二百十八年以來の事なり

五層寶塔　金堂の西にあり

高さ二十五間、四方正面各五間半、一に現身往生塔と稱す推古天皇創立の儘裝階板瑩あり層毎に四面皆板に最勝說く所の四種の龍王の名を書す九輪最下の輪に四角に鎌を立たり是皆龍王の雌を除かんが爲なり又下層の四角に箜篌を懸け角毎に寶鐸を懸たり其最上層最下層の四角の上に雲珠を居たり又塔下の外陳は遮子造、内陳は壁なり

東面　文殊維摩坐像　塑造　長各一尺六寸八分

不二法門の体相なり文殊は無畏印を施す左右に二菩薩あり維摩は脇息に憑り扇を持す一童子あり右手に花を持し舎利弗等の上に之を散す文殊の眷屬左右に列坐せり南の山上に維摩の坐あり文殊の坐は獅子二頭之を負ふ北の山麓に菩薩あり鉢を持す香積佛土より飯化菩薩に請するなり

南面　彌勒像　塑造　長壹尺八寸

脇士法蘭林大妙相二菩薩眷屬二天二王等の曼荼羅（曼荼羅とは壇を云或は輪圓具足と釋す）なり

西面　釋迦尊金棺　長壹尺八寸、高四寸五分、横三寸

寶　塔　高壹尺二寸五分

釋迦茶毘（茶毘とは火葬を云）の所なり金棺の上に栴檀木を積みて之を燒く〳〵木を運ふ二人あり寶塔には舎利を納む南は十大弟子の中七人なり舎利弗、目蓮迦葉の三人は

悲歎に堪ずして來らざるなり北は在家衆國王大臣等なり皆悉く悲相を示す

北面　釋迦涅槃像　塑造　長三尺三寸

普賢文殊左右にあり十大弟子七人坐にあり迦葉一人荼毘の時來る八部衆左右の山際に列坐す祇婆大臣右の手を取る東に四菩薩飛來れり右四面佛菩薩及雲山等咸く塑造なり元明天皇和銅四年（紀元千三百六十八年）之を造る作者不詳

此塔を現身往生塔と稱するは皇極天皇二年二月十六日聖德太子の王子等廿五人逆臣入鹿の爲に此塔内に潛みて四層に登りて遂に西に向て飛行せられしとの傳に依て此名あり古今目錄抄に壁には菩薩の立像を畫くとあれども今見る所なし舊記云元祿九年（紀元二千三百五十二年）桂昌院殿（綱吉公母公也）修覆せらる美麗なること新造の如しとあり因て按に四方の壁も此時塗り更られたるものなるべし

○大講堂　五層塔の北にあり

東西十七間、南北八間半、講堂一に聖國寺と号す聖德太子御建立敎法の講堂なり醍醐天皇延長三年紀元千五百八十五年雷火に燒失す本尊佛像は災に罹らず現堂は燒失後六十六年を經て一條天皇正曆元年京都法性寺鴨河の東今の東福寺邊なり朱雀天皇御世忠平公建立の普明寺を當寺の所領なる近江の莊を以て彼寺に替請て此堂を造る所なり古今目錄鈔綱所日記往古より此堂に於て毎歲功德講推古天皇御願夏講淳和天皇御願方廣會勝鬘會順德天皇御願其他佛名會竪義講問論義等御歷代天皇御願によりて修行あり

本尊藥師坐像　木彫金色　長八尺六寸五分

脇士日光坐像　仝　長五尺四寸

脇士月光坐像　仝　仝

四天王立像　長自六尺至六尺六寸五分　三寸五分

○大經藏　講堂の西にあり

二階造、横二間三尺五寸長三丈三寸、一に皷樓と曰ふ二階に三經等の版木を藏む經卷なし古今目錄鈔に或云百濟來朝經論與之云云堂內に伏藏あり三伏藏の其一なり

○鐘樓堂　講堂の東にあり、二階造、丈尺大經藏におなじ

鐘、高六尺五寸、口廣四尺五寸

銅燈爐　講堂前にあり

元祿七年杜昌院綱吉公母公寄附銘文あり

○上御堂　講堂北背の岳にあり

桁行十二間梁行七間、天武天皇第五皇子舍人親王本願永業大禪師（東院院主）創立にして一夏苦行四時供花の焚場なり一條天皇永祚元年（紀元千六百四十九年）八月十三日大風の爲に轉倒す佛像を講堂に遷坐す其後三百廿三年を經て花園天皇應長元年（紀元千九百七十年）七月再興す舊堂の礎石を更へず其儘造立

本尊釋迦如來坐像　木彫　長七尺五寸五分

脇士文殊菩薩坐像　長五尺一寸

脇士普賢菩薩坐像　仝

四天王像　木　長自五尺五寸至五尺八寸

此四天皇の由來は當寺の所領なる播摩の鵤莊の下司善多と云もの殺害の罪に依て同莊鎌倉に沒收せらる是を以て當寺の學頭堪能（睿光院主）俊殿擬講（調子麻呂廿八代の裔顯眞の甥也）

等數年鎌倉に在て同莊下戻の事を訴願するに當り其成就を祈誓して四天彫刻の願を起す後ち遂に同莊下戻の効を得て其願を果さん爲に後光嚴天皇文和四年（紀元二千三百十五年南朝後村上天皇正平十年なり）一丁彫始め同十二月三日當堂に安置す

○西圓堂（さんえんだう）　西室乾の岳にあり

四方正面、八角造各二間半、一に西北圓堂と号す此舊堂は元正天皇養老二年橘夫人（光明皇后母公）本願行基菩薩創立後冷泉天皇永承元年（紀元千七百〇六年）五月十七日頽倒其後二百〇四年を經て後深草天皇建長元年（紀元千九百〇九年）再造弘化三年屋根修造す

本尊藥師如來坐像　木彫長八尺　傳行基（ぎやうき）作

此本尊は七箇寺に配置する所の一なり靈驗著明にして道俗の尊崇最も敬し賽物常に堂裡に充滿す殊に朝廷にても御代參且御納物等多し

脇士十二神將像　木彫　自二尺四寸至三尺九寸　傳運慶作

西面不動明王坐像　木彫長壹尺八寸　寶山作

北面大日如來像　木彫長三尺

當寺元鎮守龍田新宮別當東之坊金堂本尊なり維新後茲に遷す

地藏菩薩立像　木彫長一尺四寸

此像は願識房乳母隨順尼（後村上天皇興國年の人）の念持佛なりと傳ふ

毘沙門天面

此面は前年献納品の一なり

儺面　木造着色　自七寸八分至九寸六分三面　傳運慶作

此面は毎歲修二會の滿夜惡魔降伏式の所用也修二會は龜山天皇弘長二年（紀元千九百二十年）に始り今尚絶えず之を行ふ

○供物調度所　西圓堂の傍なり

東西九間餘、南北四間、弘化三年再造

○手水屋　西圓堂艮の岳下にあり行者堂とも云

桁行二間半、梁行二間、龜山天皇弘長元年（紀元千九百二十二年）造立す

東　間

役行者小角坐像　木彫長二尺三寸

脇士後鬼坐像　仝　壹尺三寸

脇士前鬼坐像　仝　仝

藏王權現立像　木彫長三尺八寸

舊藏王堂本尊なり舊堂は元花山（既に上地す今は官林也）にあり今も字に殘れり其廢頽年月詳ならず

○地藏堂　手水屋の東にあり

三間四面、現堂は舊閼伽井房（妙音院）の本堂にて其舊地なり文政中本堂のみを殘して當房を北寄の地に移替たり後其空堂を以て今地藏堂に充つ

本尊地藏菩薩坐像

○三經院　西圓堂の南東にあり南面

桁行十一間、梁行五間五尺二寸、當院は推古天皇の詔に依て護國濟民の爲に法華勝曼維摩の三經を一夏九旬講讀するを以て此名あり

此講筵は推古天皇三十年（紀元千二百八十二年）夏四月曇徴法定（並に高麗の僧）の二僧に勅して大講堂に於て三經の講肆を開かしめ給ふを始とす爾來恒例となれり

後堀河天皇嘉祿（紀元千八百八十七年）三年四月播磨國鵤莊の水田十八町を以て勝曼會并談議等の資料に下賜せらる同年冬勝曼會を東院夢殿より西院講堂に移し三經の談義を講堂より當院に移して以て之を行ふ爾來連綿夏談今尚絶ず

本尊聖德皇太子勝曼經御講讃坐像

此尊像は中御門天皇享保中（元年迄紀元二千三百七十五年）塔中阿彌陀院住職祐懷の作る所なり

○西室　三經院北背棟續にあり

東西五間四尺南北廿七間二尺七寸（但院家共）

舊室は聖德太子御建立後凡三百九年を經て醍醐天皇延長四年（紀元千五百八十六年）雷火の爲

講堂回祿の餘炎に罹る其後三百五年を經て後堀河天皇寛喜三年紀元千八百九十一年四月再建

當室の南の端は三經夏談場なり其北端は勝曼會講師房なり龜山天皇弘長元年紀元千八百二十一年九月後鰐峨太上皇の行在所となる別當記に詳なり

○三經院前池

此は四條天皇嘉禎二年紀元千八百九十六年六月開鑿す

○辨財天堂　三經院池の中島にあり

衍行四尺梁行三尺、俗に亥島辨天と稱す勸請歳月詳ならず

○浴室　三經院池の下大道の南にあり

東西二間一尺八寸、南北七間二尺七寸、大湯屋と号す造立年月詳ならず湯船は

高倉天皇承安二年紀元千八百三十二年改造の事次第日記に見えたり

孝謙天皇勅願吉祥天修行の際牛王の水を以て湯立を行ふ因て牛王の湯と稱す

悉くは一陽集に見えたり

○聖靈院　金堂東廻廊の外にあり、南面

東西六間南北九間　聖靈院は初め勸學院と号し斑鳩宮の花園今花園院舊址の南三面其舊址なり因云墨微法定勸勅等當院に住せりにあり年序を經て廢頽す鳥羽天皇天仁二年紀元千七百六十九年綱封藏の南に七間三面の房宇を營み呼て聖皇院今の攻會院松立院等の地是なり と云鳥羽天皇保安二年紀元千七百八十一年別當經尋僧正伊房卿男大に東室を經營し北五房を東室とし南三室を寶殿とし以て聖皇尊像及王子等を安置して新聖靈院と号す即是なり

○中寶殿

○聖德皇太子束帶坐像　沈香木長二尺七寸五分　傳御自作

此は攝政三十五歲の御時の尊容なり相傳ふ體內に如意輪觀音像法華勝曼維摩の三經を納むと云ふ此像初め勸學院に安置ありしを同院廢頹後綱封藏に移し後聖皇院に安し亦茲に遷坐す

脇士山背大兄王子坐像　長二尺六分　傳佛師止利作

此は衲袈裟衲は佛の着るものを着し如意を持す卽ち聖德太子の王子なり

脇士殖栗王子坐像　長一尺七寸五分　作者仝

此は劔を帶び念珠箱を持す皇太子同胞の弟也

脇士茨田王子坐像　長一尺八寸五分

此は太刀を持す同御弟なり

脇士惠慈法師坐像

此は衲袈裟を着し柄香爐を持す高麗國の僧にて皇太子の敎師なり當寺三論宗の高祖とす

○西寶殿

二臂如意輪觀音坐像　長四尺二寸

此は皇太子の本地佛と稱す高麗より渡來す

六臂如意輪觀音坐像

此臺裏に興正菩薩筆する所の銘に云

此像者調子九世八代孫之勸不日奉迎同十一月下旬始修補之箇中寶珠念珠蓮花輪御光花大法師

葉盤柘榴花蓋圖座方座始造加焉同三年三月十五日安置當院爾願主西大寺衆首
比丘敏尊奉行比丘盛適
斑鳩便覽云皇太子以沈香木自作賜調子麿處也と見ゆたり

○東寶殿

地藏尊立像

此像は敏達天皇六年冬十月太子時年六歳百濟國より將來す蓋本邦地藏像の始なり願主は聖明王百濟國王作者は化人御衣木は赤栴檀なり依て三殊勝の地藏尊と云ふ

○東室　聖靈院北背續き

東西五間四尺六寸、南北二十七間二尺六寸院室共

古今目錄抄に云東室は九房十八間也一房に二間宛小子房も又九房也是も二間を

爲房と南三房を新に爲聖靈院矣保安二年院室共同時に修補す總て東室は延長八年雷火之時之を厄すること无也と見ゆたり

○妻室

東西二間南北二十間餘、當屋は後村上天皇正平九年紀元二千〇十四年北朝後光厳天皇文和三年也二月他寺の舊房を購得て造立す初め東室の東に相並びて北六間を厨屋と曰ひ南六間を妻室と曰ふ卽聖靈院供僧の住房たり當時妻室の南端に窓を穿ち其下及西脇に土塀ありしを明治十二年四月山主千早定朝今の如く玄關を構へ北厨屋を以て座敷となす

○厩

金堂東廻廊の外にあり、東面
方壹間なり　舊妻室の坤の隅にありしを明治十二年同室營繕の際茲に移す

驪駒

此駒は推古天皇六年夏四月甲斐國司貢獻する所の驪駒の模なり

棟梁采女作

調子麻呂立像

此は百濟國調宰相の子なり歸化して太子の御者となれり

上件二像は東山天皇元年紀元二千三百五十一年八月廿三日安置す世に顯眞作と傳ふは誤なり

觀勒僧正堂

厩の北に隣る、南面

僧正は百濟の人なり、推古天皇十年十月貢し來る、學術あり、曆本及天文地理方術の書を献す、三十二年四月、沙門祖父を殺すものあり、朝廷始て僧正を置き、僧尼を檢校す、觀勒選ばれて此任に當る

○鏡池

仝抄云聖靈院御影と同時の池也矣と見えたり

○食堂

東室の東にあり、綱封藏の北東に接近す

東西四間、南北十二間、推古天皇元年創立の儘也此堂に於て毎歳正月朝拜式を行ふ

○細殿

食堂の北背に接續す

本尊藥師如來坐像　木彫　長一尺九寸

脇士日光菩薩立像　仝　長二尺二寸五分

脇士月光菩薩立像　仝　仝

梵天立像　塑造　長三尺

帝釋天立像　仝　仝

四天王像　仝　長各二尺七寸

○觀音像　仝　長五尺五寸

○綱封藏　食堂の西南にあり

東西四間、南北十二間、寶藏三十三曇の其一なり聖德皇太子の三國傳來の珍寶三寶初起の法器を藏する所にして古來勅封なりしを後改めて綱封となす維新後は其事廢れて保護の行屆かざるより去明治十年十一月古器寶籙許多を宮內省へ獻納して恩典下賜の榮を得るに至れり

○護摩堂　勸學院にあり今閉鎖す

方三間五尺、當堂は初め寶光院主實乘圓信房の本願にて後村上天皇正平十八年紀元二千三十三年北朝後光殿天皇貞治二年也十二月北金剛院舊址綱封藏の跡に就て護摩堂を建立せんと欲して不退護摩行を修す然れども事成ずして入滅す是を以て其徒弟印實先師の素願を果さん爲に其志を繼て後小松天皇應永十年紀元二千六十三年南大門の東に護摩堂を創立して長日焚燒不退の道場となす其後三百六十一年を經て桃園天皇寶曆十四年紀元二千四百二十四年四月四日天火の爲に燒失す時に大工棟梁長谷川越前掾高能四棟梁の一人平群郡四里の住人發起して勸進經營す明和六年より同年九月廿六日に至り落成入佛供養す今の護摩堂是なり佛像及器物は燒失の際新堂に遷坐せしを此際當堂に安置す

本尊不動明王立像　長三尺一寸

脇士逝多迦童子立像　長一尺五寸

脇士矜迦羅童子立像　仝

銘云康暦二年庚申紀元二千四十年後圓融天皇御世南朝後龜山天皇天授五年也卯月廿三日作者舜慶民部綵色清玄舜玄房云云とあり智證大師作と云は誤なり

弘法大師坐像

厨子に安置す銘云應安八年乙卯紀元二千三百四年後光厳天皇の御世にて南朝後龜山天皇の天授元年なり三月日大佛師法眼慶秀僧舜慶比丘湛譽云云とあり

仝　西　間

上宮聖皇東帯坐像

厨子に安坐す天保十三年出開扉後中院主千晃の志願に由て京師の佛工清水淨運に命じて聖靈院本尊を模造せしめしもの

○聖天堂　勸學院にあり事務所前の堂舍是なり今閉鎖す

三間四面　後桃園天皇安永九年紀元二千四百四十年塔中彌勒院千絶大僧都再造

本尊雙身歡喜天　金銅　長四寸五分

十一面觀音立像　木彫　長二尺二寸五分

此は舊龍田神社別當東之房本尊なり

雙身勸喜天立像　銅石木造　自長三寸二分至五寸九分　九軀

毘沙門天立像　木彫　長一尺二寸八分

觀音立像　仝　長一尺五寸五分

聖德太子二歳立像　仝　長二尺一寸五分

○十二天堂

桁行二間、梁行一間、當堂は修正會の時神供修行の道場なり再建年月聖天堂に同じ

本尊阿彌陀如來坐像　木彫　長二尺三寸五分　運慶作

脇士觀音坐像　木彫　長一尺八寸　傳作者仝

脇士勢至坐像　仝　仝

大日如來坐像　仝　仝

彌勒菩薩坐像　仝　仝

○西大門

東西四間二尺五寸南北仝上

四足造高二丈一尺　舊門は八足造貞享元年十一月夜燒失翌年假門造立今の門元錄十年再建

○北門

四足造桁行東西南北とも二間二尺五寸

瓦銘云曉弘法橋之本願云云とあり曉弘は後奈良天皇天文年中の人なり此門は明治廿三年寄角門と振替へ今の處に移せるなり

○東大門

八脚造東西五間、南北七間八寸　造立年代未詳

此門は東院西院との中間にあり俗に中の門又は東御門と稱す造立歳月詳ならず

○東院

東院は西院の東に接續す上宮王院と號し斑鳩寺又鵤僧寺とも云此地は聖德皇太子斑鳩宮の舊址なり太子薨去後御子山背大兄王住ませ給ひしに皇極天皇二年十一月蘇我入鹿の爲に斑鳩宮燒亡す其後八十餘年を經て天平年間に至ては行信大僧都七大寺總檢校此地に閑居し上宮太子の舊蹟を表し一寺を建立せんことを奏聞しければ聖武天皇天平十一年夏四月太政大臣正三位藤原房前朝臣に勅して斑鳩宮の舊址を改て寺となし給ふ則今の東院上宮王院是なり其後百二十年を經て淸和天皇貞觀元年九月十三日（三代實錄云五月十九日）院主道詮律師白河太政大臣藤原良房公を經て奏聞しければ厚く料物を賜ひ院家殿堂咸く再修し勅して郡群郡の水田七町四反を施入し給ふ後又百六十五年を經て後一條天皇治安三年冬十月廿六日法成寺入道道長公御堂關白ご日實

地檢分して修繕せらる又百廿一年の後近衛天皇天養元年是より先北面廻廊轉倒す其十一月所司三綱の奏聞に因て久安二年（天養の翌年也）六月廿九日始めて北面廻廊修理せらる其後詳ならず近くは後陽成天皇慶長九年（紀元二千二百五十九年）より三ヶ年東西兩伽藍とも幕府より修營を加へられて今に至る

○夢殿

夢殿は一に聖堂又上宮院又上宮王院と号す上宮太子の創立にして三昧定を修し給ひし禪室是なり入鹿の兵火に侵されざりしも山背大兄王薨じて後は漸次荒廢し行信和尚の盡力によりて天平十一年再造する所なり其後貞觀治安天養仁平永萬建久寛喜文暦慶長等の修補を經て今に至る

本尊救世觀音立像　長木彫　六尺六寸

此像は往古より秘佛なり白布を以て佛体を包帶す資財牒天平寶字年記に云上宮王等身觀世音菩薩木像壹軀金箔押之矣云云

前立正觀音立像　木彫　長四尺八寸

九面觀音立像　仝　一尺二寸五分

此像は推古天皇三年夏四月淡路島に漂着する所の樟木を以く百濟人池邊直氷田に命して觀音像を刻ましめ數年の後之を吉野の比蘇寺に安置す又其一半を以て太子自ら十一面觀音像を造り給へりしは則此九面觀音像なり古今目錄抄に云白檀にて造る無縫目之像也卽御自作白檀の木色大座は檜木也這像の佛頂に只九面のみ有て十一面と謂は本面と太子との尊顏を加へて十一面と謂ふ是古來之口傳也云云とあり

仝　西　面

聖德皇太子孝養立像　木彫　長三尺

仝　東　面

阿彌陀如來坐像　木彫　長一尺一寸五分

傳云惠心僧都作禮堂念佛會之本尊也云云

仝　北　面

聖德太子唐形立像

脇士山背王立像

脇士殖栗王立像

此三軀は黑漆厨子に安置す此像の由來は推古天皇五年夏四月阿佐太子百濟威德王の子なり來朝して聖德太子時年廿五に謁見す時に阿佐太子自ら聖德太子の尊容を模寫し

一は太子に獻し一は携へ國に歸る其獻せし所の肅像は去十年宮內省へ獻納せしを以て十二年六月死工安井彌平當所古市場住に命して之を造らしむ

春日影現立像

住吉影現立像

此二軀は往昔明惠上人の爲に宅磨法印澄賀の拜寫せし神影を模造するものなり相傳ふ推古天皇二十七年秋八月十五日皇太子齋して夢殿に入らせ玉ふ時特命ありて中臣鎌子秦河勝同く入る時に住吉鹿島の二神首座として諸神影向の事ありしとの傳に依て夢殿に對し北面に春日四所住吉との五所神を祭祀して鎭守となす五所宮卽是なり此社維新後天滿社地に遷坐せしを以て此由來の湮滅に歸せんも亦愛惜に堪さるより去る十二年六月死工安井彌平をして之を造

らしめて安置する所なり

行信僧都坐像　乾漆造　長三尺

此は七大寺總檢校にして當院主の元祖なり

道詮律師坐像　塑造　長三尺

此は福貴寺住僧にて後ち當院第七世院主なり

○武殿院

舍利殿西並にあり

東西五間、南北四間半、一に繪殿と云太子傳を繪けるが故なり又護持堂一に御に作と云又玉琳抄に云此殿は太子寢殿之舊跡也矣云云目錄抄に云舍利殿繪殿共に在レ疊南面在高檻西東南階在之云云今も同じ東山天皇寶永七年紀元二千三百十年七月內陣に佛檀を造り觀音を安置すと古記に見ゆ

本尊正觀音坐像　金銅　長二尺九寸　傳鞍作止利作

世に夢違の觀音と稱す

聖德太子坐像　長一尺二寸五分　傳聖武天皇勅作

太子傳繪障子

○此障子は後三條天皇延久元年紀元千七百二十九年二月より五月に至て圖畢繪師は泰致眞なり此畫は去十年獻納す今の畫は寺僧千範彌勒院主光格天皇天明四年紀元二千四百四十四年畫工吉村法眼周圭光貞に命して模寫せしむ同七年九月に至り成功す

○舍利殿　夢殿の東北にあり武院殿東並なり

東西五間　南北四間半

本尊南無佛舍利　水晶五輪塔に安す

傳曰敏達天皇二年春二月十五日聖德太子時年二歲東方に向ひ南無佛と唱へ握手を開き舍利一粒を墮し給ふ故に此名あり釋尊左眼の舍利也と云初め夢殿に安置す順德天皇承久元年紀元千八百七十九年慶政勝月房延期弟子今の舍利殿を修繕して夢殿より當殿に安置す毎日午時之を南面に出して講式を行ふ今尙然り

現今舍利塔を安置する所の黑漆佛壇は後光嚴天皇貞治四年紀元一千二十五年南朝後村上天皇正平廿年五月十日造立する所なり

聖德太子二歲立像　木彫　長二尺三寸　佛師丹好作

體內に德治二年紀元千九百六十七年後二條天皇御世の銘あり後伏見天皇正安元年迄紀元千九百五十九年　橘寺住僧堯願房本願に由て久米寺戒日上人夢想を奏聞して持明院殿卽伏見天皇也第三皇子卽花園天皇也三歲に成らせ給ふ尊容を模し奉りて佛師丹好に命して彫刻せしむ卽南

無佛聖像の權輿なり但此像は第二の模造なり

因に云德治二年は花園天皇御卽位の前年にて御年十一に成せ給ふ

仝殿內障子繪圖

東障子は漢高祖四皓を請するの粧ひなり西障子は周文王渭濱に遊獵するの圖なり土佐光信の筆と傳ふ享保中屏風に製して寶藏に納む去十年獻納の一なり

今の畫は畫工長谷川等眞の模寫せしものなり

○傳法堂　舍利殿繪殿の北背にあり

東西十二間四尺二寸、南北五間二尺九寸

資財帳に云瓦葺講堂壹間長八丈四尺廣三丈六尺云云緣起貞觀年記に云七間二面講堂壹字云云卽是なり後ち今の名に改む學問所なり東に扉わり行信大僧都の學室是なりとぞ

中間

本尊阿彌陀如來坐像　長四尺

脇士觀音菩薩立像　長五尺二寸

脇士勢至菩薩立像　長仝

東間

阿彌陀如來坐像　長三尺

脇士觀音菩薩坐像　長三尺八寸

脇士勢至菩薩坐像　長三尺八寸

西間

阿彌陀如來坐像　長四尺

脇士觀音菩薩立像　長五尺五寸

脇士勢至菩薩立像　長五尺五寸

前立地藏菩薩像　長六尺二寸

脇士梵天立像　長五尺二寸

脇士帝釋天像　長五尺二寸

四天王像　長自三尺至三尺一寸　四軀

天蓋

舊記に云佛頂に覆花蓋此蓋は中宮寺伽藍の蓋也其外古佛餘多有之彼尼寺荒廢

之時因爲本寺移容當寺也云云

因云中宮寺は舊幸前莊東院の東五丁にあり字を御舊殿と云是其趾なり此寺は御母の爲に聖德太子建立せさせ給ひしなり一に法興寺又鵤尼寺とも号す小治田宮御宇推古天皇御世宮寺七所の一なり中宮太子御母宮殿の南は蘆垣宮太子の別宮也北は岡本宮上宮は斑鳩宮太子の宮殿也なり此中間なるか故に中宮と稱す後ち寺となす今の中宮寺は天文年中造立する所なり

○鐘樓堂　舍利殿の東にあり

東西一間三尺五寸、南北二間六尺、目錄抄に云此鐘は中宮寺の鐘也云云綱所日記に應保三年紀元千八百二十三年二條天皇御世也癸未二月廿九日庚寅上宮王院鐘樓建立之云云毎日午刻七聲之を撞く因て七つ鐘と云ふ卽ち舍利拜禮の時刻を報ずるなり

梵鐘　經三尺四寸三分

○一切經輪藏　傳法堂の乾にあり

四間四面なり一源和尚北室主僧勸進して弘仁三年新造す庫内に黄檗版一切經を藏す

○禮堂　夢殿の前面にあり

東西七間南北五間半　舞樂法用所なり後堀河天皇寛喜三年紀元千八百九十一年修繕して東西三尺五寸南北三尺之を廣むと綱所日記に見ゆ創立年月不詳

○廻廊　東院の廻廊なり

造立年月既に出せり總延長六十二間三尺八寸幅一間五尺八寸なり

○步廊　夢殿西壇より西門に至る

此步廊は東山天皇元祿年元年迄紀元二千三百四十六年新造

○福石辨天社　禮堂巽隅にあり

初め當村福井小路の西端にありしを明治十二年二月礎石社壇とゝ此に移す

○五所宮舊跡　禮堂の坤隅にあり

聖德太子入室の時夢殿に影向し給ひし春日住吉の五所神を北向に鎭坐し奉りし舊趾なり此社維新の際天滿社地に遷坐せしを以て其舊跡を失はんか爲に去十二年二月地藏院にありし臥牛の石形を居て標とす

○南大門　東西四間南北一間五尺八寸

又名閉門一作不明又南門又勅願門又上宮門と号す但不明の稱唯未た其謂を得すと雖も太子御在世より既に此稱あり此門に懸けありし推古天皇宸筆の門額は去十年

獻納の一物なり

資財帳に云檜皮葺門二門一は長さ七尺廣さ三丈一尺一は長さ三丈廣さ一丈 五尺云云蓋二門の中一は今の閉門なるべし目錄抄に云南門は八つ足也云云 今尙然り此門造立の事舊記に洩せり

○四脚門

夢殿西廻廊外にあり

東西一間二尺九寸、南北一間五尺八寸、資財帳に謂へる檜皮葺門二門の一是なるべし

○坑門

東廻廊外築地内にあり

目錄抄に云東西に四足門有之云云蓋往古の東門なり古圖に蘆墻宮御幸門と註せり今平常開かず

○律學院

今勸學院と云西院東門の北側にあり

東西五間三尺五寸、南北七間三尺五寸當院舊太子堂と號す當初北背に律學院あり東隣に金光院あり堂坊共に惣名金光院と云龜山天皇文永九年紀元千九百三十四年創立にして後水尾天皇元和年中元年迄紀元二千二百七十五年燒失寛永中元和年舊の如く太子堂のみ再建し擬して律學院と號す

後宇多天皇弘安中紀元千九百三十八年興正菩薩の弟子等當院に住し律學を專にす自稱して新律學派と云律學院の名蓋是時に起る乎

中殿

本尊聖德皇太子馬上尊像 長三尺

此は赤袍を着し弓箭を執り白馬に乘らせ給へる十六歳の尊容なり後水尾天皇

寛永四年紀元二千二百八十三年應圓鴻恩櫻池院主作る所なり

東殿

地藏尊立像

傳鳥佛師作

法隆寺伽藍終

附錄

葦垣宮古跡

葦垣宮は今の東院より六町ばかり巽方に上宮成福寺と呼ぶ地あり是其舊跡なりと傳ふ東宮傳に云く富小川のほとりかみやの葦垣宮と申すは法隆寺造營の間十五年を經るを以て時々來りみろなはすの間御休息所として四方葦垣なる假の宮を營み御休有らせ玉ふ所なり而して伽藍（伽藍とは西院を指て云）の東なる平地御心稱ひ葦垣宮より續きて斑鳩宮を造らしめ玉へるなり則ち當寺（當寺とは法隆寺西院を云ふ）の東院の地是也今の上宮王院の地夢殿禪定に入らせ玉ひし殿なり古老の口傳に據れは此葦垣の宮は後ち本宮斑鳩の宮を造營と共に更に造營し共に斑鳩の宮又上宮とも號す上宮太子此の葦垣の宮に於て薨去し玉ふ（日本紀扶桑畧記等に太子斑鳩宮に薨去の事見たるは此宮を指せるなるべし斑鳩本宮と思ふは甚だ非なり）其

後廿一年太子の薨去は推古天皇二十九年二月なり其後二十一年は皇極天皇元年也を經て入鹿の兵火に罹り遂に燒失畢ぬ其燒跡に上宮王府の家臣等共同して佛閣を造立す時の人斑鳩の寺又上宮の寺と號す爾るに天智天皇八年に又燒失す日本紀の天智紀八年十二月是冬災二斑鳩寺一と見へたるは則其寺を指て云へるなり然るを後世に至りては此寺なることを知らで斑鳩寺とし云へば法隆寺の別號と推測するなもて日本紀に載れるは今の法隆寺の災と思ひ誤るなりこは所謂千慮の一失にこそ其後遊に星霜を經て其後の經歷は百八十一年也本寺の法隆寺なり僧に實乘と云ものあり嘉祥二年紀元千四百九十三年仁明天皇御世也更に再建して寺名を葦垣山成福寺と名づけたり然れども時人の多くは斑鳩寺の舊名を稱へたりと見へたり云云

幸隆寺

東院伽藍より三町餘艮位に當りて二町四方の田面悉く幸隆寺と字す是則其舊址なり中宮寺の舊址則字御藤殿より二町ばかり北方にあたれり相傳ふ上宮王府の侍臣に泰臣幸隆と云あり命を承て中

宮に奉仕す幸隆其恩に感じて佛閣造立の志を發す時に同族泰川勝廣隆と云ものあり曾て蜂岡寺を山城國楓野に造立して自ら檀越たり時の人川勝の名字を呼て廣隆の寺と云後ち太泰廣隆寺と呼す是なり幸隆輙ち之に擬して寺を中宮の北隣信乃の地に造り居を其前に構へて檀越となる時の人之を呼て亦幸隆の寺と云遂に幸隆を以て寺号となす後ち幾多の星霜を經て一屋餘すなく檀家桑家なる云及僧房共に燒失す日本紀天智天皇九年夏四月癸卯朔壬申夜半之後災法隆寺一宇無餘大雨雷震と見へたるは蓋此寺なるべし但燒失年代古記に洩たれは人或は疑ふもあるべけれど而して燒失後檀家及住僧等之を再建するの資に乏しく僅に自家を造るに過ぎざれば或は幸前莊舊中宮寺跡今字御藤殿の東隣なる今の幸前村即是なりに聚り住居を卜し或は同族なる太泰廣隆寺にたよりて同寺を再興したりしなり一書に曰寺被災之後衆人不得定寺處故百濟入法師率衆人介造楓野蜂岡寺云云見へたるは此幸隆寺の事を傳へ訛れるなり

法隆寺伽藍巡拜記終

橋本旭扇堂出版圖書目錄

奈良名勝獨案內圖 各種	一枚摺	平城坊目考	三冊
奈良及附近名勝栞	一冊	平城坊目遺考	三冊
奈良の栞	一冊	大和周遊誌	二冊
多武峯栞	一冊	奈良縣下國寶陳列目錄	一冊
畝傍路の栞	一冊	コロータイプ 笠置山繪葉書	各種
寫眞大版 天理教會本部	一枚	コロータイプ 多武峰繪葉書	各種
寫眞大版 天理教祖墓所	一枚	吉野山之栞	一冊
寫眞大版 同祭場及其他	三枚	奈良明細全圖	一折
奈良東大寺大佛像	一枚摺	寫眞大版二十一景笠置山古蹟名勝	一枚摺
大和國地圖 各種	一枚摺	月瀨道の栞	一冊

笠置山栞　一冊

寫眞大版十七景　月瀬梅林　一枚摺

天理教祖本部神之御國山鄉發之圖　一枚摺

天理教會御本部　神樂式之圖　一枚摺

天理教會御本部　大祭式圖　一枚摺

初瀬路の栞　一冊

奈良歩兵五十三聯隊全景及絵はがき　各種

天理教々廳獨立奉告祭紀念圖　一枚摺

寧樂古今圖　一枚摺

中島鹿山筆鹿の圖　各種　一枚摺

名所大和みやげ　二十五景　八枚　一組

奈良名所旅客便覽　一枚

奈良及附近名勝圖　十二枚　一組

大和一圓實測圖　一折

奈良名勝巡路案內　一冊

奈良名所巡覽記　一冊

大和巡路全圖　一枚摺

法隆寺伽藍巡拜記　一冊

コロータイプ奈良名勝繪はがき　各種

82
676

笠置山桒　一冊
富士見大阪十七景　月瀬梅林　一枚摺
乃木神社本部神之御國曲舞奉之圖　一枚摺
天理教會神樂式之圖　一枚摺
天理教會御本部　大祭式圖　一枚摺
初瀬路の桒　一冊
奈良歩兵五十三聯隊全景及塔はがき　各種
天理教々庭開立本部祭記念圖　一枚摺
寧樂古今圖　一枚摺
中島鹿山筆鹿の圖　各種　一枚摺
名所二十五景　大和みやげ　八枚　一組

奈良名所旅客便覽　一枚
奈良及附近名勝圖十二枚　一組
大和一圓實測圖　一折
奈良名勝巡路案內　一冊
奈良名所巡覽記　一冊
大和巡路全圖　一枚摺
法隆寺伽藍巡拜記　一冊
コロータイプ奈良名勝繪はがき　各種

明治四十四年四月四日印刷
明治四十四年四月十一日發行

定價金貳拾錢

奈良市脇戸町八番屋敷
著作者　鳥居武平
奈良市破石町十五番屋敷
發行者　橋本信吉
奈良市橋本町三十六番地
印刷者　乾善兵衛
奈良市橋本町三十六番地
印刷所　奈良明新社　長電話二四六番
發行所

不許複製
發行
證之

87
676